

京都大学	博士（ 医学 ）	氏 名	近藤 尚哉
論文題目	Prescription of potentially inappropriate medications to elderly hemodialysis patients: prevalence and predictors（高齢透析患者における潜在的不適切処方：頻度と予測因子）		
（論文内容の要旨）			
【背景】			
高齢患者は、その脆弱性や薬物代謝能の低下から薬剤有害事象のハイリスク群と考えられている。透析治療中の高齢患者では、腎機能低下のために薬物代謝能が落ちていること、しばしば複数の併存疾患を有していること、多薬の頻度が高いことから有害事象のリスクはさらに高くなると考えられている。 Beers クライテリアは高齢者において有害事象を起こす可能性の高い薬剤(潜在的不適切処方) のリストであり、本邦においても 2008 年に日本版 Beers クライテリアが作成されるなど、各国の実情に合わせて修正されて使用されている。 しかし、これまで高齢透析患者における潜在的不適切処方の実態を検討した報告はない。			
【方法】			
2002 年～2008 年の J-DOPPS (Japan-Dialysis Outcomes & Practice Patterns Study) のデータを用いて横断研究を行った。対象患者は 65 歳以上の維持血液透析患者とした。 日本版 Beers クライテリアに基づき、少なくとも 1 剤の潜在的不適切処方が処方されている患者を特定した。さらに多重ロジスティック回帰分析を行い、潜在的不適切処方と関連する患者特性や施設特性について探索的検討を行った。			
【結果】			
1367 名の患者について解析を行った。その結果、半数以上（57%）の患者において少なくとも 1 剤の潜在的不適切処方が行われていた。もっとも頻度の高い潜在的不適切処方はヒスタミン H2 受容体拮抗薬（33%）、抗血小板薬（19%）、交感神経 α 受容体遮断薬（13%）であった。潜在的不適切処方は多職種カンファレンスが行われている施設（オッズ比 0.67、95%信頼区間 0.48-0.93）、研修施設（オッズ比 0.59、95%信頼区間 0.39-0.90）では統計学的に有意に少なかった。一方で、複数医師が透析処方内容を変更できる施設では、潜在的不適切処方が統計学的に有意に多かった（オッズ比 1.65、95%信頼区間 1.12-2.44）。			
【結論】			
高齢血液透析患者において、半数以上の患者に対して潜在的不適切処方が行われていることが明らかとなった。透析診療に従事する医師は、潜在的不適切処方に対してより注意を払う必要がある。多職種カンファレンスは潜在的不適切処方を減らすことで患者の利益につながる可能性がある。			

（論文審査の結果の要旨） 透析治療中の高齢患者は、高齢による脆弱性に加え、腎機能低下のために薬物代謝能が低下していること、しばしば複数の併存疾患を有していること、多薬の頻度が高いことから薬剤有害事象のリスクが特に高いと考えられる。本研究では、高齢透析患者において、有害事象を起こす可能性の高い薬剤（潜在的不適切処方）の頻度と関連する要因について検討した。 解析対象者において、半数以上（57%）の患者において少なくとも 1 剤の潜在的不適切処方が行われていた。もっとも頻度の高い潜在的不適切処方はヒスタミン H2 受容体拮抗薬（33%）、抗血小板薬（19%）、交感神経 α 受容体遮断薬（13%）であった。潜在的不適切処方は多職種カンファレンスが行われている施設（オッズ比 0.67、95%信頼区間 0.48-0.93）、研修施設（オッズ比 0.59、95%信頼区間 0.39-0.90）では統計学的に有意に少なかった。一方で、複数医師が透析処方内容を変更できる施設では、潜在的不適切処方が統計学的に有意に多かった（オッズ比 1.65、95%信頼区間 1.12-2.44）。 以上の研究は高齢透析患者における潜在的不適切処方の実態解明に貢献し、高齢透析患者における診療の質改善に寄与するところが多い。 したがって、本論文は博士（ 医学 ）の学位論文として価値あるものと認める。 なお、本学位授与申請者は、平成 2 6 年 1 1 月 2 0 日実施の論文内容とそれに関連した試問を受け、合格と認められたものである。
要旨公開可能日： 年 月 日 以降